

高等学校家庭科におけるホームプロジェクトの研究 (第1報) : ホームプロジェクトのテーマ分析とその 背景

著者	坂本 和代, 福原 美江
雑誌名	宮崎大学教育文化学部紀要. 芸術・保健体育・家政 ・技術
巻	8
ページ	29-40
発行年	2003-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10458/1403

高等学校家庭科におけるホームプロジェクトの研究 (第1報)

—— ホームプロジェクトのテーマ分析とその背景 ——

坂本和代* 福原美江

A Study of Home Project Method in Home Economics for Senior High School (PART I)

— An Analysis and Social Background in Home Project Method —

Kazuyo SAKAMOTO · Yoshie FUKUHARA

I. 研究の目的と方法

高等学校 (以下、「高校」と略記) 家庭科における「ホームプロジェクト」は、1949年の新制高校の発足とともに教育課程に導入された。その導入経緯と家庭科におけるホームプロジェクトの位置づけ等については、先行研究で明らかにされている¹⁾。それによると、ホームプロジェクトは「青年の基本的必要」に応じた発達段階に必要な教育ととらえられ²⁾、その内容は家庭や地域の生活改善と家族の民主化を標榜した新設家庭科の教育目標と合致し、さらに、家庭科実験学校の指定等³⁾によって伝達され、急速に定着していった。

このようなホームプロジェクトは、戦後50年の高校家庭科教育史のうえでは重要な学習活動のひとつで、家庭科教育方法の特色として重視されてきたが、「ホームプロジェクト」が学校家庭クラブ活動とともに、普通教科としての家庭科「家庭一般」の「内容」(大項目)に位置づけられたのは、1978年版の高校学習指導要領からであった。1989年版学習指導要領が実施された現行の高校教育課程では、普通教科としての家庭科(4単位)は、男女ともに必修で、「ホームプロジェクトの実践と学校家庭クラブ活動」の時間数は「各科目の授業時数の10分の2以内をこれに充てる」ことができるとしている⁴⁾。また、ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動のねらいは、家庭科で「学習した知識と技術を生かして、生活を見直し、課題を見いだして積極的に改善し、各自の家庭生活や地域の生活の充実向上を図る能力と実践的態度を育てる」(『高等学校学習指導要領解説 家庭編』1989年12月、文部省、36ページ) ことにおき、基本的には1978年版学習指導要領と同様で変化していない。

このねらいからもわかるように、ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動は、授業としての家庭科学習の成果を、自分自身の家庭生活や地域社会に生かす「実践の場」として位置づけられている。その学習方法は、課題解決学習のプロセスを組み入れ、学習者自身が、家庭生活

*宮崎県立高鍋農業高等学校

の中から「生活の問題や課題」を発見し、それを解決するために家庭科で学んだことを生かして計画と方法を立案し、実施していく自主的な活動である。さらに、その学習活動のプロセスを記録し、レポート等にまとめて他者に報告し、評価する方法が採用されている⁵⁾。このようなホームプロジェクトの活動プロセスは、1999年版学習指導要領の改訂方針にも継承され、「自ら課題を見いだし解決を図る問題解決的学習の充実」及び「家庭・地域社会との連携や生涯学習の視点を踏まえつつ、学校における学習と家庭や社会における実践との結び付きに留意」することが強調された。

このようなホームプロジェクトは、指導者側からみると長時間あるいは長期にわたるサポート体制が必要になるが、生徒とともにひとつの目標に向けて取り組み、その取り組みの度合いが直接的に成果として現れるなど、終了した時の充実感はないものにも代え難いことを実感している。しかし一方では、物質的には「豊かな生活」ゆえに生活に潜む新しい「問題や課題」が見えにくく、テーマの発見と設定が次第に困難な状況にある。さらに、2003年度以降は、普通教科としての家庭科「家庭基礎」（2単位）の新設による授業時間数の削減により、正規の家庭科授業時間内でホームプロジェクトと学校家庭クラブの活動に充てる時間的余裕はなく、次第に形骸化していく傾向がみられる。

そこで、本研究では、これまでのほぼ50年間の全国的な高校家庭科におけるホームプロジェクトの取り組みの実態と、宮崎県におけるホームプロジェクトの実態、及び指導者としての教員と学習者としての生徒の取り組みへの意識等を明らかにし、これからのホームプロジェクト活動に向けての示唆を得ようとするものである。

第1報では、ホームプロジェクト活動において、解決すべき生活の「問題や課題」をどのように設定しているか、いいかえれば、高校生のホームプロジェクトに寄せる問題意識と生活課題、及びテーマ設定と時代背景との関連について明らかにしたい。分析対象のホームプロジェクトは、1953年の第1回・全国高等学校家庭クラブ研究発表大会（於・お茶の水女子大学）から、2001年の第49回大会までのほぼ50年間に発表されたホームプロジェクト・367点である⁶⁾。具体的な視点としては、(1)ホームプロジェクトと「生活改善普及事業」⁷⁾との関連性、(2)ホームプロジェクトと『国民生活白書』との関連性、などを考察しテーマ設定の動機と背景を明らかにしたい。

また、第2報では、宮崎県におけるホームプロジェクト活動の実際を調査し、宮崎県独自のホームプロジェクト活動の課題と問題点等を明らかにしたい。

研究の方法は、資料分析による文献調査と、質問紙調査法や聞き取り調査法との併用である。第1回大会から第49回のテーマ分析では、生徒向けに発行されている全国家庭クラブ連盟誌『F H J』（2000年版）と、その後の全国家庭クラブ発表大会要項などから調査した。さらに、2001年度の各都道府県の家庭クラブ事務局に対するアンケート調査等を実施した。宮崎県に関するホームプロジェクトの資料は、宮崎県教育委員会の元指導主事・小川正子氏所有の当該資料のほか、2001年度宮崎県家庭クラブ連盟事務局・日南工業高校等から借用した資料を使用した。

なお、本稿では、「ホームプロジェクトのテーマ」を単に「ホームプロジェクト」と記述し、高等学校は「高校」と略記する場合もあることをお断りしておく。

II. ホームプロジェクトのテーマ分析

1953年の第1回から、2001年の第49回発表大会までのテーマ総数・367点を概観すると、1970年頃までは農村の生活改善の取り組みが中心であり、1970年代以降は、都市型の生活問題の改善を中心としていることが分かる。そこで、テーマ設定の動機とその背景を明確にするために、すべてのテーマに通し番号をつけ、1971年までを第I期（テーマ番号1～150）、1972年以降を第II期（テーマ番号151～367）として分析することにした。なお、367点のテーマ一覧は割愛したが、本稿に関するテーマは必要に応じてテーマ番号とタイトルを記載することにした。

1. 第I期の特徴：生活の合理化と能率化をめざして

1953年から1971年の第I期では150のテーマが発表された。これらに共通する点は、戦後の社会経済の疲弊、食糧不足、農村民主化運動の影響を受けて、農村の衣食住の生活の合理化と能率化を意図した発表が多いことである。たとえば、1950年代には[1・台所改善]や[5・簡易石油缶冷蔵庫]等、生活財の改善やその代用の方法などがテーマにされている。また、「住宅はまだ戦後である」（1959年版『建設白書』）と言われたように17点のホームプロジェクトが住宅や住環境の改善を取り上げている。

そこで、この第I期のホームプロジェクトと、当時の農林省生活改善課が提唱した「生活改善普及事業」との関連性について考察したところ、特に1953年から1957年のテーマ総数35点のうち20点についてはその関連性が認められた。1958年以降は、その数は減少するものの、21点のテーマが生活改善と関連している。以下、その関連性について分野ごとに考察する。

【衣生活に関するホームプロジェクト】

「生活改善普及事業」では、衣生活に関しては、①被服全般、②農作業着、③寝具、④日常着、⑤疲労対策、⑥安全対策・衛生対策、の6つに分類しそれぞれの改善事項を具体的に設定し指導している。これらの指導事項に関連したホームプロジェクトのテーマは8点あり、以下のとおりである。この時期は、日本の大部分が農村であったが、その農村部へも服装の変化が及び、それに伴う洗濯の必要性、農薬の普及と農作業の変化などにより、被服事情も大きく変貌していった。ホームプロジェクトでは、作業着の研究や被服整理の改善方法の提案[テーマ19, 33, 105, 141]や、それまでの和装用下着を洋装用に作り替え、洋装に推移しつつある衣

ホームプロジェクト番号とテーマ	生活改善普及事業・指導事項との関連
17・各種繊維と洗濯の研究	3日に1度の洗濯の実施
19・高知県の農村漁村の婦人作業衣の研究	改良作業衣の着用
33・わが家の野良着の改良	改良作業衣の着用・ビニルハウス用作業衣・農薬防除着の工夫
43・私と母の下着を工夫して	改良肌じゅばん・下ばきの着用
48・冬季における洗濯物の乾燥について	3日に1度の洗濯の実施
105・母の被服整理の労力を軽くする	たたんで収納する運動
112・ふとんの手入れに忙しい母を助けて	ふとんカバーの使用・ふとん再生の工夫
141・作業衣の母を明るく楽しく	改良作業衣の着用

服に下着を合わせることを提案した〔テーマ43〕などがあり、衣生活改善の普及活動の一端を担っていることがわかる。

【食生活に関するホームプロジェクト】

この時期の食生活の改善事項は、食糧不足からくる熱量と栄養の不足を解消することであった。そのため「フライパン運動の推進」に代表されるような食事の洋風化と副食の工夫が推進された。ホームプロジェクトでも、〔テーマ108〕のように動物性食品を食事に取り入れ、食習慣を改善するための提案や、〔テーマ114及び115〕のようにカルシウム摂取のための研究が行われている。

一方、女性農業従事者の家事が過重労働の原因となっていることから、〔テーマ13及び61〕にみられるように「炊事担当者の農作業早じまいの奨励」に関連するホームプロジェクトが実施されている。これは、炊事作業等の家事労働も農作業の一部と考え、生活時間帯を見直して食事作りの時間確保と食事内容の改善に目を向けたもので、この考え方は、現在の「家族経営協定」⁹⁾の基本となるものである。

さらに、普及事業とは直接関係しないが、〔23・夏みかんの合理的利用と普及をめざして〕や〔78・ヒラミレモンの利用〕のホームプロジェクトは、農作物の加工と普及をテーマとしている。

以上のように、食生活に関するホームプロジェクトは、改善する実践の場を家庭内におきながらも、地域社会への提案と普及運動の要素が大きい。各ホームプロジェクトは、生徒による生活の必要から取り組まれているが、農業改良普及員や生活改良普及員による「生活改善普及事業」の直接的な影響が大きいことが明らかである。

ホームプロジェクト番号とテーマ	生活改善普及事業・指導事項との関連
4・自慢にならぬ大和がゆの追放を	摂取栄養バランスの確保
11・農繁期の食生活改善	経営類型を考えた献立の工夫
13・食生活改善と農繁期共同炊事	炊事担当者の農作業早じまいの奨励
15・おやつの実態調査	子供向きおやつの工夫推進
18・単位食（朝食）の工夫	摂取栄養のバランス確保
20・粉食の普及をめざして	米不足に対応したパン作り
22・緑黄色野菜を食べましょう	野菜利用の普及
38・着色食品に関心をよせて	天然色素の活用
59・冬季の野菜-果物貯蔵室の研究-	ビンの導入
61・炊事習慣に関する研究	炊事担当者の農作業早じまいの奨励
89・能率と嗜好を考えた活用しやすい献立の工夫	経営類型を考えた献立の工夫
108・動物性食品を取り入れるために	廃鶏利用の普及・フライパン運動 卵を食べる運動
114・農薬中毒の母のための食と衣の工夫	卵を食べる運動
115・おいしいみそ汁の工夫	カルシウム強化みその普及

【住生活に関するホームプロジェクト】

戦後の生活改善普及事業において、住居の問題は食生活に次いで重要な問題であった。この住宅の困窮と不便さを解消するため、生活改善普及事業の指導事項は多岐に渡った。たとえば、①「住まい方改善と望ましい住宅設計」、②「流し、調理台の改善」「各種電気製品の選択」「給水設備の改善」「採光の工夫」、③「個室の確保」「暖房の改善」、④「環境衛生」「上手な住まい方とよい住まいの普及」、⑤「共同保育施設」、などが改善事項とされ、特に旧式農家住居の「かまどの改善」は、全国各地域で集中的に取り組みされた。

ホームプロジェクトでは、1953年の第1回大会で「1・台所の改善」が発表され、その後も住居に関するホームプロジェクトは20点が発表されている。そしてそれらのすべてが、生活改善普及事業と関連している。その背景には、高校家庭科にホームプロジェクトを導入したルイス(D.S.Lewis)が、学校に台所モデルルームを設置することを推進し、その写真を家庭科教師向けの手引書⁹⁾に掲載するなど、高校家庭科でも重要な生活課題として把握されていた。しかし住居の改善には高額な費用を要することから、当時の高校生は、知識の普及や啓発活動を行っていたと考えられる。

また一方では、[テーマ8及び12]にみられるように、農繁期の季節保育所での保育活動と調理の工夫について発表していることから、季節保育所での子どもの世話を高校生たちが中心となって行い、農業の補助的な働き手としての役割を担っていたことがわかる。

ホームプロジェクト番号とテーマ	生活改善普及事業・指導事項との関連
1・台所の改善	流し台、調理台の改善
5・簡易石油缶冷蔵庫	作業動線の短縮と設備の工夫
8・可愛いママちゃん	季節保育所の設置
12・かわいいママちゃん	季節保育所の設置
26・寒冷地住宅の研究	新建材の普及
27・太陽熱利用のお風呂	太陽熱利用温水器の設置
29・蠅のいない部落をめざして	害虫の駆除
39・室内清掃と塵埃について	住まい方教室の開設
46・涼しく住もう工夫	住まい方教室の開設
51・弟の生活指導-テレビ視聴を通して	能率的な電気器具の導入
53・農村照明改善の内-第1報	へやを明るくする運動
69・太陽熱利用の温水器	太陽熱利用温水器の設置
72・私の勉強部屋の保温について	住まい方教室の開設
98・太陽熱をわが家へ	太陽熱利用温水器の設置
111・ふろの効果的なわかし方	太陽熱利用温水器の設置
118・わが家を住み良く	住まい方教室の開設
120・明るく衛生的な農村へ-照明の研究	へやを明るくする運動
133・姉と私のせまい部屋を機能的に美しく住もう工夫	個室の確保（間仕切りの工夫）
140・農家の居間を明るく	へやを明るくする運動

【家庭管理に関するホームプロジェクト】

家庭管理についての生活改善事項は、①「家計簿様式の作成」、②「家計診断手法の確立」、③「所得の適性配分と予算生活の実行」、及び④「生活時間の適性配分」「適性な役割分担の推進」などがある。生活改善普及事業は、戦前までの封建的な家族関係を改善する方法として、農業と家庭の会計を明快にすることを勧めた。ホームプロジェクトでは〔テーマ32、82、90〕などにみられるように家計簿記帳の効果と記帳方法の改善について研究を進めている。

一方、戦後の貧困の中での家庭生活を立て直すために、〔テーマ9及び31〕のように、各ライフステージにかかる費用を試算し、冠婚葬祭の簡素化（会費制結婚式、交際費申し合わせ、ムダ・ムリ・ムラの解消）を提案する取り組みもある。

また、〔テーマ122〕は、生活時間の適正化のための「家族の家事分担」をすすめ、女性農業従事者の家事を労働の一部にとらえ、ゆとりある生活のために家事労働を家族で分担することを提案している。

ホームプロジェクト番号とテーマ	生活改善普及事業・指導事項との関連
3・甥の離乳期の世話	家族の家事分担表の作成と活用
7・私たちの手で（母への協力）	かちや（母ちゃん）9時（に寝る）運動の推進
9・出産から結婚に至るまでに要する費用	冠婚葬祭の簡素化
31・因習改善の一端	冠婚葬祭の簡素化
32・山村農家家計の実態と家計簿の改善	農林漁家向家計簿の普及
82・家計簿の反省	既成家計簿の活用
85・予算生活1年生	家計運営の計画性についての診断表作成
90・健康生活と家計の改善	既成家計簿の活用
107・母をもっと楽に	かちや（母ちゃん）9時（に寝る）運動の推進
122・我が家の管理の改善—母の生活を中心として	家族の家事分担表の作成と活用

2. 第Ⅱ期の特徴：個々人のライフスタイルの確立をめざして

第Ⅱ期（1972年～2001年）に発表されたホームプロジェクトは、テーマ・151から367の217点である。1970年代の国民生活は、オイルショックによるインフレの影響が大きく、それがホームプロジェクトのテーマにも反映している。また、女性就労者の増加¹⁰⁾を背景に、いわゆる第1次産業の農林水産業以外の女性雇用者への協力や、母親の生活時間帯改善などのテーマも見られるようになった。そのため農村生活を中心にした「生活改善普及事業」よりも、都市生活を中心にした生活改善やライフスタイルへの指向等、個々人の生活関心をテーマにした研究が増えている。1990年代には、環境基本法の成立を受けて、ごみ問題や環境問題のテーマが増加したほか、家族のコミュニケーションを取り上げ、家族関係を見直すホームプロジェクトが目立つようになった。この第Ⅱ期では、前半期と後半期に分けて考察したい。

(1) 第Ⅱ期前半期の動向：社会的関心の芽生え

第Ⅱ期前半期のホームプロジェクトは、食生活の改善に力点を置いたテーマが多い。これらのテーマと「生活改善普及事業」との関連をみると、被服分野の1点と食物分野の13点であり、第Ⅰ期に比べてその数は減少している。以下では、食生活に関するホームプロジェクトと「生活改善普及事業」との関連を中心に考察しておく。

【食生活に関するホームプロジェクト】

生活改善普及事業では、1950年代半ばまでは、不足する熱量と栄養素の摂取方法の工夫を呼びかけてきたが、1960年代に入ると経済的な生活向上を背景に、農村でも栄養素の過剰摂取が心配されるようになり、「動物性脂肪の見直し」や「減塩減糖食の普及」など生活習慣病の食事改善の指導に取り組んでいる。1970年代は、清涼飲料水が普及し糖の摂りすぎが身体に与える影響が問題となったため「清涼飲料の多飲の改善」を指導し、また、家電製品の普及と調理場の改善が進んだことから「スピード料理の普及」も指導されるようになった。さらに、合成保存料や着色料に対する使用抑制も改善指導事項に挙げられている。

このような改善事業の影響を受けて、食生活に関するホームプロジェクトでは、[219・食塩を控えよう] や [237・たんぱく質の摂り方の工夫]、[236・サイダーから牛乳へ] [224・スピーディで豊かな食卓づくり] [234・妹のおやつを考える] などの研究が取り組まれている。

この時期の生活改善普及事業では、従来の改善事項の他に「無リン洗剤・石けんの見直し」「手洗いの見直し」などの環境問題への取り組みがみられるようになった。しかし、ホームプロジェクトで環境問題が取り上げられるようになるのは1980年代以降であり、時期的な関連は見られなかった。

ホームプロジェクト番号とテーマ	生活改善普及事業・指導事項との関連
186・手作りみそを我が家の食卓に	手作り加工品の普及
208・食卓のカラーは自然色で	天然色素の保持工夫
214・合理的な食生活をめざして－食物保管の工夫から	冷凍保存の普及
219・食塩を控えよう－高血圧の母に協力して	減糖・減塩の工夫
222・搾乳時の母の作業着を考える	酪農用作業着の工夫
224・スピーディで豊かな食卓づくり	スピード料理の工夫
234・妹のおやつを考える－食品添加物を控えるために	合成保存料の使用抑制
236・サイダーから牛乳へ	清涼飲料水多飲の改善
237・たんぱく質の摂り方の工夫－コレステロール値の高い母の健康を願って	多食の見直し

【家庭管理に関するホームプロジェクト】

家庭管理については、[181・働く母のために－兼業農家の母を楽しく－] があり、「生活時間の適正化」についてのホームプロジェクトである。なお、第Ⅱ期では、住生活・家庭経済に関する研究や、共同炊事・共同保育所など地域に関する研究は見られなかった。

(2) 第Ⅱ期後半期の動向：「私」の生き方・ライフスタイルの模索

1980年代に入ると不況から好況へと時代が移り変わり、ホームプロジェクトのテーマは、これまでの生活の物質的向上を求める視点から、大量生産・大量消費の反省と自然回帰¹¹⁾へと移り変わっていく。さらに、高齢社会やリサイクル運動をテーマとしたホームプロジェクトも増加している。

そこで、1980年以降のホームプロジェクトと『国民生活白書』等が指摘する生活問題との関連性を考察するために、1981年から2000年までの19冊の『国民生活白書』におけるキーワードについて調査した。その結果、19冊の同白書のうち7冊がそのタイトルに「ゆとり」「豊かさ(ゆたかさ)」「実り」の語句を用いているが、1992年を境に景気は減速し、1993年にはバブルが崩壊しているため、その後は「モノ」の豊かさから「ヒト」の豊かさへと変化していることが明らかになった。そこで、1981年から2001年までのホームプロジェクトテーマ150点(218～367)のうちから、『国民生活白書』のタイトルに関連のあるものについて考察した。

【ゆたかさ】

テーマに「豊か」の語句を用いたホームプロジェクトは3点である。1984年の「247・豊かさを見直そうーすぐに捨てないでー」は、モノの豊かな時代において使い捨てるのではなくその再利用を勧めている。1992年の「303・心豊かな住まい方の工夫ー手作りでタンスカバーをー」や1993年の「307・TWINDS への贈り物ー豊かな遊び心を考えるー」では、モノづくりを通して生活や心の豊かさを求めている。テーマに「豊か」という語句を用いてないが、生活上のゆとりを求めたホームプロジェクトは、「254・和服の美しさを生かした祖母の家庭着ー暖かな室内着を中心にー」があり、和服のリフォームに取り組んでおり、それまで財産として考えられていた和服を生活に取り入れて楽しむ余裕がみられる。

一方、食生活に関しては、これまでは「身体を維持するための知識」の側面が強調されてきたが、1990年代は伝統的な郷土の食文化を見直し、趣味的な料理作りに関するものが増えてきた。特に、郷土の食文化に関するホームプロジェクトは4点で、「287・伝統食品を見直してー食卓に梅をー」(三重県)、「299・秩父っこ、そばっこー郷土の特産品を生かしてー」(埼玉県)、「302・郷土の食品でヘルシーライフ」(徳島県)、「317・魚の郷土料理をたずねて」(熊本県)などがある。また、「グルメブーム」といわれる今日、趣味的な食事作りをテーマにしたものも3点見られる。「333・ぼくの食文化へのチャレンジ」や「345・ぼくの挑戦! 魚料理」では、学校で学んだことを基礎に家庭での食事づくりに取り組んでいる。特に、「353・我が家は大豆でパラ大豆ー大豆がおいしく生まれ変わる日ー」(大分県)では、大豆農家である生徒が地域で盛んに行われている豆腐作りに取り組み、おいしい豆腐ができるまで試行錯誤を重ねている。これらの発表者は、いずれも男子生徒であり、「地方の時代」といわれた地域再生事業や「一村一品運動」からも影響を受けている。さらに、1999年の「349・食卓革命 手作りVS加工食品ー加工食品は手作りをしのげるか?ー」(埼玉県)では、市販の加工食品と手作りの総菜を家族全員で食味、価格、利便性を調べ、市販加工食品の方が勝っているという結果を出している。これは、食べる事への欲求よりも、食の外部化に対する興味関心を探求した発表である。その一方で、不況が深刻化してきた1997年には「332・THE SETUYAKU」(北海道)が見られ、ホームプロジェクトのテーマ設定は国民生活の実態に機敏に対応していることがうかがえる。

【家族】

1992年版『国民生活白書』のタイトルは「少子化と家族・子供」で、結婚と若者や「家」と価値観の変化を述べているが、バブルが崩壊した1993年～1996年の同白書では、「家庭回帰」と家族関係の見直しについて述べている。ホームプロジェクトにおいては「家族・コミュニケーション」をテーマにした研究が増加し、1988年以降は15点で、そのうち祖父母など高齢者家族との関係を見直したものが8点と半数以上を占めている。

また、1995年以降では10点に増え、[318・家族の絆を大切に！]、[319・家族リレーー思いやりのバトンを受け取ってー]、[326・姉と共に生きるー障害者の姉に笑顔をー]、[337・歩もう 家族と共にーTalking Without Speakingー] など、「絆」「共生」をキーワードにコミュニケーションのためのスキルについて研究している。

一方、高齢者とのコミュニケーションについては、1997年に3点の発表がある。[335・祖母とのコミュニケーションを深めるー婆ちゃんの骨粗鬆症を通してー] や [336・つなごう知恵の輪ー祖父母とのハートフルコミュニケーションー]、[338・高齢社会を生き生きとー大好きなおじいちゃん、おばあちゃんへー] では、高齢者との交流を主題に研究している。また、1998年には [343・ボケてもよろしくー祖父と楽しく暮らすー] のように、「痴呆」を現実問題として受け止めるテーマも見られた。さらに [359・曾祖母の笑顔を！ー老老（孫）介護に挑戦してー、1999年] や [366・家庭介護を考えるーばあちゃんと楽しく暮らすー、2001年] などは、高校生が介護する側の一員としての意識を持ち、介護に取り組んでいることがわかる。近年の高齢者とのコミュニケーションをテーマにした研究では、別居で離れて暮らす祖父母との交流について取り組んだものも多く、離れていても家族のつながりを持ちたいという意識の変化が伺える。

【自己啓発】

1999年の『国民生活白書』では、「能力重視」や「自己啓発」がキーワードとなっている。2000年のホームプロジェクト [360・「父のような生き方がしたい」ー21世紀！今、自立の時を迎えてー] では、将来の自分像を実現するために、今、自分自身は何をすべきかを取り上げ、生き方について追究しており、これまでの生活財や生活様式を対象としたホームプロジェクトとは異なっている。

【生活環境とリサイクル】

この時期のホームプロジェクトは、環境やリサイクルのテーマが16点ある。

生活排水に関しては [231・手作り石けんを利用して] [320・「水」をもっと大切にーわが家の排水対策ー] [321・湖の汚染防止は家庭からー台所排水を見つめてー] [352・わが家の環境回復大作戦ー土と水にやさしい暮らしを求めてー] などが見られる。また、アクリルたわしの使用実践を発表した [362・魔法の一本の針からーエコロジー問題への第一歩ー] がある。さらに、生活排水の問題を地域環境まで広げたものとしては、[301・Let's Look at and Think about 琵琶湖の魚] がある。

家庭のごみの減量については、[309・物の命を大切にーわが家の買い物袋を製作してー] [348・『僕はエコロジー博士』ーゴミの減量から始めた環境保全の実践研究ー] がある。観葉植物が流行した1992年には、[300・心和む生活空間をー私のグリーン計画] が発表されたが、その後は、同様のテーマは見られなかった。

衣服のリフォームについては、発表大会開始当時から多く発表されているが、第Ⅰ期は「不足する物資の代用」を主たる目的としていたが、第Ⅱ期では「モノの再利用」を目的としたリフォームに取り組んでいる。顕著な例のテーマには「322・Let's リフォーム—命をあげようアイデアで—」がある。リサイクルについては、1982年に「278・わが家の暮らしにひと工夫—ダンボールの有効利用—」があったが、その後は見られなかった。

Ⅲ. 考 察

1. 生活改善普及事業がホームプロジェクトに与えた影響

1958年から2001年までのホームプロジェクトの研究テーマについて考察してきたが、第Ⅰ期のホームプロジェクトは、農林省の提唱した「生活改善普及事業」と深く関わっていることが明らかになった。前述のように、ホームプロジェクト導入期に刊行された『家庭科ホームプロジェクトの手びき』（文部省）の中では、その意義を青年の精神的発達の支援のための教育と位置づけているが、当時の高校家庭科の現場においては「生活の改善」であったといえる。当時の日本の多くの地域が農村であり、また、食料事情も厳しく、農家でなくても何らかの形で農業を行う兼業農家であった。そのため、農林省（当時）が提唱し、各都道府県で実践される「生活改善普及事業」の内容は、各家庭で広く普及していったと考えられる。また、この時期のホームプロジェクトは、各家庭内の改善に止まらず、地域への普及活動へと積極的に展開している。このような活動から、その当時の高校生は、各地域において知性的なリーダーとしての役割を担っていたことが考えられる。

一方、第Ⅱ期の1972年以降のホームプロジェクトは、「生活改善普及事業」との関連性は弱くなっている。このことは、日本の産業構造の変化、いいかえれば、農家の減少と地域の都市化が原因であると考えられる。それはまた、「生活改善普及事業」の指導を受ける家庭の減少を意味し、多くの家庭において「生活改善普及事業」と関わる機会が失われ、その結果としてホームプロジェクトのテーマに反映されなくなってきたと考えられる。

2. ライフスタイルや生き方の確立を求めて

第Ⅱ期のホームプロジェクトは、『国民生活白書』のタイトルとキーワードに関連があることが明らかになった。しかし、その関連性は、「生活改善普及事業」のような直接的な影響を受けてはいない。その理由は、生徒が自らの生活課題を時代背景の中から見いだしているからである。特に1980年以降のホームプロジェクトは、生徒が生きる当該社会における経済の問題や人の生き方等の問題を敏感に察知して、家族関係の見直しや家族のコミュニケーションを取り上げたものが増加している。また、高齢社会の問題については、高校生自身が家族の一員としてどのような役割を果たせるかを考えたテーマが多く、介護技術や衣食住の支援よりも、むしろ高校生自身が、家庭の中の潤滑油としての存在になろうとしている姿が見られる。そしてホームプロジェクトの研究対象となる祖父母は、生徒と同居している祖父母だけではなく、遠く離れて住む祖父母が増加していることに特徴がある。このことから、生徒の「家族」への意識が多様化していることが伺える。さらに2000年には、自己啓発、つまり自分自身を対象にしたテーマや、自分の職業選択についてのホームプロジェクトも見られるようになった。

以上のことから、高校家庭科におけるホームプロジェクトは、「生活の改善」から「ライフ

スタイルや生き方の確立」へとその研究内容を変化させていることが明らかになった。

3. 「モノ」から「ヒト」への変化

ホームプロジェクトの研究テーマからみた第3の特徴として、「気候変動枠組条約」が採択された1992年前後から、「環境問題」にかかわるホームプロジェクトが増加していることである。前述のとおり、ホームプロジェクトでは家庭排水や家庭ごみの減量について多く取り上げられ、特に1999年には、7点の発表中3点が環境問題への取り組みについて発表している。これらの地区発表者の選出は、発表の前年に決定することから、直接的には1997年に採択された「京都議定書」の影響を受けていると考えられる。このようにホームプロジェクトの研究テーマは、食料や衣料などの生活財の充足と生活様式の改善から、自分と家族の生き方へ、つまり「モノ」から「ヒト」へと変化している。それと同時に研究対象も、「地域生活」から「家庭生活」そして「自分自身」へと「ヒト」中心へと変化していることが明らかになった。

第2報では、宮崎県のホームプロジェクトについて考察し、第1報とあわせて本研究の成果と残された課題について言及する予定である。

(2002年9月26日受理)

【注】

- 1) ホームプロジェクトに関する先行研究は多いが、以下の2点について紹介しておく。
 - ① 柴静子の一連の労作である「占領下における家庭科教育の成立と展開（Ⅳ）－新制高等学校家庭科教員の再教育と教職現場－」（『中国四国教育学会教育学 研究紀要』第43巻、1997年）では、当時の指導主事の残した記録をもとに、CIEがIFELを通じてホームプロジェクトを日本の家庭科教師にどのように伝えたかを明らかにしている。
 - ② 伊波富久美「我が国における家庭科ホームプロジェクトの変遷」（『長崎大学教育学部教科教育学研究報告』12号、1989年）では、1947年から1978年の学習指導要領におけるホームプロジェクトの記述と、ホームプロジェクトの手引き書などから、高校家庭科の教育課程における位置づけの変遷を跡づけている。その結果、ホームプロジェクトの現代的課題は、生活課題の見つけにくさにあることを指摘している。
- 2) 文部省『家庭科 ホームプロジェクトの手引き』1952年、中央書籍、8ページ。
- 3) 前掲・注1)及び注2)のほか、日本家庭科教育学会編『家庭科教育50年－新たな軌跡に向けて－』（建帛社、2000年、148ページ）などがある。
- 4) 1994年度からすべての高校では、男女ともに「家庭一般」「生活一般」「生活技術」（各4単位）の3科目の中から1科目を選択して履修している。これら3科目でも「ホームプロジェクトの実践と学校家庭クラブ活動」は、内容の一項目に位置づけられているため、男子生徒の取り組みも増えている。
- 5) 家庭科教科書（家庭一般）には、ホームプロジェクトや学校家庭クラブ活動についての意義や活動方法などが記載されているが、特にホームプロジェクトについては、「課題の発見」から解決に向けての「計画・plan」→「実施・do」→「評価 see」のプロセスについて事例を挙げて記載している。
- 6) この発表大会は全国を、①北海道、②東北、③関東、④北陸、⑤中部、⑥近畿、⑦中国、⑧四国、⑨九州、の9地区に分けているが、④北陸と⑤中部、⑦中国と⑧四国は、代表を合同で選抜するため、ホームプロジェクトは7地区から7点が発表される。また、この大会の社会的認知度を高め、また高校生に対する賞賛の機会を増加するために、1962年の第10回大会には文部大臣賞を、1990年

の第38回からは開催県教育委員会賞を、1994年の第42回大会からは産業教育振興中央賞を設けた。なお、高校家庭科・ホームプロジェクトのテーマに関する研究は、二宮喜美恵「ホームプロジェクトの研究発表の全国的傾向と今後の展望」(『大分大学教育学部紀要教育科学』第6巻6号、1984年)に分析されているが、1970年代までのテーマ分析である。

- 7) 農林省の生活改善普及事業は1948年に始まった。初代の生活改善課長は大森松代で、1947年版家庭科学習指導要領作成にかかわったのち農林省に入省し、1948年から17年間にわたり生活改善課長を務めた。その後の「生活改善普及事業」は、都道府県職員である生活改良普及員が農村の生活改善を目的として、各家庭を巡回、あるいは各地区の生活改善普及センターにおいて指導を行い、初期の普及活動は、衣食住と農家経営の全般にわたっていた(農村生活問題研究会編集・農林水産省農蚕園芸局生活改善課・編集協力『よりよいくらしの原点を求めて 農家農村生活便覧』1986年)。
- 8) 天野寛子は、「家族経営協定」について、男女共同参画社会基本法(1999年)をふまえて「家族経営農家において、『個』の確立、人間の尊厳に値する農家生活の実現をめざして、家族間において、就業条件(農業労働時間・家事労働時間・介護労働時間、休日、有給休暇、生理休暇等)、労働報酬、経営参画の方法等役割分担の仕方、経営継承、生活のルール、老後の生活設計を含む生活全般について、民主的に話し合いを行ない、家族員の合意のもとに文書の形で協定を締結すること」と定義づけている(天野寛子『戦後日本の女性農業者の地位—男女平等の生活文化の創造へ』ドメス出版、2001年、324ページ)。
- 9) 前掲・注2) 184ページ参照。
- 10) 女性雇用者がはじめて家事専業者を上回ったのは1984年である。その格差は次第に広がり、1986年には42万人上回った(労働省婦人局編『婦人労働の実情』1987年、4ページ)。
- 11) アメリカで1970年に始まった「アースディ」は日本にも波及し、1990年エコロジーブームを起こした。また、同時期の1989年には(財)日本環境協会が「エコマーク事業」を開始し、1991年には経団連が「地球環境憲章」を発表した。